

第48回

神奈川県福祉作文コンクール 入 選 作 品 集



令和7年度

まえがき

福祉作文コンクールは、昭和52年から始まり、今年で48回目となりました。次代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の心が芽生え、誰もが「ともに生きる」社会が実現することを願つて実施してまいりました。

今年は、県内の小・中学校合わせて131校から3,924編の応募がありました。児童・生徒数が年々減少していく中で毎年多くの方に参加していただいています。

応募作品は県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を行い、このたび、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の計56編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選作品の中から、最優秀賞16編を掲載したものです。どの作品も、体験や経験を通じて感じたこと、考えしたことなどが自分自身の言葉で丁寧に書かれています。子どもたちの想いに触ることで、大人の方にも『気づき』や『問い』が生まれ、様々なことを改めて考えるきっかけとなり、優しい気持ちが社会全体に広がることを願っています。

本来ならば、すべての入選作品を紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び準優秀賞は作品の題名・学校名・氏名を掲載させていただきましたので、ご了承ください。なお、作品は、児童、生徒の気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しておりますことを申し添えます。

結びにあたり、コンクールに参加された小・中学生の皆さま、指導にあたられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をお願いしました委員の方々、(N) NPO教育かながわフォーラムの皆さまに心よりお礼申しあげます。

また、運営にご協力くださいました神奈川県、(株)神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、(株)テレビ神奈川、(株)神奈川新聞社、(公財)日揮社会、福祉財団の皆さまに深く感謝申しあげます。

令和7年12月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

(順不同／敬称略)

日本放送協会横浜放送局
コンテンツセンター長
株式会社テレビ神奈川
営業局次長兼営業推進部長
株式会社神奈川新聞社
クロスメディア営業局次長兼営業管理部長
公益財団法人日揮社会福祉財団
常務理事兼事務局長
神奈川県福祉子どもみらい局福祉部
地域福祉課課長
神奈川県立総合教育センター
教育相談課指導主任
社会福祉法人神奈川県共同募金会
常務理事
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
常務理事
特定非営利活動法人NPO教育かながわフォーラム

深	中	松	笠	佐	小	伊	花
井	島	本	井	藤	野	藤	澤
康	孝	美	熱	恭	たま	修	雄一郎
信	夫	穂	史	平	み	身	

第48回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

誰とでも楽しく過ごすためには

湯河原町立東台福浦小学校

五年

南部

正樹……………1

神奈川県教育長賞

わたしのともだち

三浦市立上宮田小学校

二年

余田

祭……………3

日本放送協会横浜放送局長賞

かわいい私の弟

藤沢市立六会小学校

五年

薙森かなで

……………5

tvkかながわMIRAI賞

素直な心にふれて

聖セシリ亞小学校

六年

松井

彩来……………7

神奈川新聞社長賞

気付くこと、寄り添うこと

横浜市立飯島小学校

六年 橋 新太 9

日揮社会福祉財団ふれあい賞

ぼくのお兄ちゃん

小田原市立山王小学校

五年 我妻 遼哉 11

神奈川県共同募金会会長賞

『ありがとう』

川崎市立宮前小学校

六年 高月 健多 13

神奈川県社会福祉協議会会長賞

前とちがうくらし

厚木市立北小学校

五年 小泉 結愛 15

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

私のリズムで進む

神奈川県教育長賞

兄が見せてくれた、幸せの形

日本放送協会横浜放送局長賞

姉から学んだこと

t v k かながわ M I R A I 賞

カラフル

神奈川新聞社長賞

見守る心

横浜市立篠原中学校

三年 矢部 宮瑚

伊勢原市立山王中学校

三年 小島 杏奈

川崎市立塚越中学校

三年 前田 結莉

川崎市立柿生中学校

一年 大久保 歩

秦野市立本町中学校

一年 諏訪 寛次

29

日揮社会福祉財団 ふれあい賞	大井町立湘光中学校	三年	藤澤 優羽	33
教科書じや学べなかつた福祉	座間市立東中学校	二年	鶴見 柚月	36
神奈川県共同募資金会会長賞	厚木市立林中学校	三年	後藤 杏香	39
支援をする人のために	神奈川県社会福祉協議会会長賞	二年	・	43
知つてみなきやわからない	・	三年	・	43
優秀賞・準優秀賞入選者名簿	・	四年	・	43

小學生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

誰とでも楽しく過ごすためには

湯河原町立東台福浦小学校

五年 南 部 正 樹

私のいとこは障害があります。病院から発達障害と言われています。

いとこは中学一年生で、一緒に遊ぶときは、始めは楽しいけれど、時間がたつにつれ、いとこに合わせることが面倒だと思うようになってしまいます。私より年上なのに、遊んでいるときに人の物を勝手に取つてしまつたり、自分が負けそうになるとどこかに行つてしまつたり、すぐ泣いてしまつたりと、遊んでいても楽しくなくなり、なんて幼い人だろうと思つてしまっています。

でも、いとこは私が遊びに来てくれるのを楽しみにしていて、会うととても喜んでくれ

るので私もうれしくなります。また、本を読むことが大好きで、図書館に行くとずっと本を読み続けています。図書館から帰つてくると、私に本の内容を詳しく教えてくれます。私は、いとこのことを自分より幼いと思っていましたが、こんなにたくさんの中を読むことができてすごいなと思うようになりました。

どうしたらいとこも自分も楽しく遊べるだろうと考えました。例えばゲームで負けても商品がもらえるルールにしたり、物を探しに行くゲームにしたら、いとこも自分も楽しめるのではないかと思いました。このように、できないことを知つて、別のルールを考えたり、おたがいが楽しめるゲームを考えたりすることが大切なではないかと思いました。次にいとこに会いに行くときにこの方法で遊んでみたいと思います。

障害がある人もない人も同じ人間で、得意なことや不得意なことがあり、楽しい、悲しいと思う気持ちもあります。障害があるから一緒に過ごすのが難しいと思わずに、どうしたら一緒に楽しく過ごせるのかをこれからも考えていきたいと思っています。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

わたしのともだち

三浦市立上宮田小学校

二年 余田 祭

わたしの友だちに、ももかという子がいます。妹と同じ年で、まい年いつしょにりょ行に
いったり、出かけたりしています。

ももかは、かいほうせいにぶんせきついしようというびょうう氣です。生まれてからも歩け
ないとおいしさにいわれていました。だけど、わたしはももかとりよ行でいつしょに歩
くのがゆめでした。あそんでいても、いつしょに歩くれんしゅうをしました。りょ行までに、
ももかはたくさん歩くれんしゅうをしていました。2さいで出会ったももかが、5さいの時
のいづへのりょ行で、はじめて手をつないで歩くことができました。まだすぐころんてしま
うし、右と左と体ぜんぶで歩くから、とつてもゆつくりだけど、小さなわたしのゆめが、ひ

とつかないとしました。

小学生になつたももかは、車いすで学校に行つてゐます。わたしにとつては気づかない小さなだんさも、ももかにとつては大きなだんさで、車いすはすぐうごかなくなつてしまひます。ももかに「たすけて、といえるようになろう。」といつしょに大きな声を出されんしゅうをしたけれど、そういわれなくとも気づいてあげられる人になりたい、とも思いました。この世界から、気づかないような小さなだんさがなくなつて、スピードが出てしまつさかもなくなつてほしい。「たすけて。」といわなくとも気づいてもらえる、やさしい世界になつてほしい。そしたら、ももかと同じ、しようがいがある友だちと、あそびをえらばずたくさんあそべるのに、と思ひます。

わたしはももかから、たくさんのこと教えてもらいました。小さなわたしは、しようがいをもつ人たちが、えがおになる世界になつてほしいと思うことしかできません。でも小さなわたしの思いがつながつて、いつか大きな世界をかえられるとしんじています。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

かわいい私の弟

藤沢市立六会小学校

五年 薫森 かなで

私の弟はダウン症です。最初は心ぞうの手術があつて大変だったのですが、今は家族のア
イドル的そんざいで、えがおがとてもかわいい、六さいの自まんの弟です。

成長がゆつくりな特徴のダウン症ですが、弟は足が速いです。そして、もちろん困ること
大変なこともあります。例えば、「待つて」ができなかつたり、いつもどちらがう場所では、か
んきょうになれてなくて、泣き出してしまうこともあります。でも一番大変なことは、弟の
言つていることが、こつちに伝わらないことです。それでも頑張つて伝えようとしてくれて、
分かることもあります。とくに「テレビ」と話しています。テレビが大大大好きです。一緒に
にいると毎日楽しいけど、特にうれしかったことは、私が八ヶ岳屋外体験教室に行つた時に、

家で弟が私の代わりに家族の場をもり上げてくれてたと帰つてきて、親に教えてもらい、知つたことです。他にも、もつともつと明るいことがあり、弟が生きているだけで楽しいです。しようらい、きびしい社会に出て、改めて自分がダウン症だと知つても、周りになにか言われようとも自分がやりたいことをやつてほしいです。だれかの助けをかりてもいいし、分からなかつたら私にも聞いてほしいです。だから、自分はみんなとちがつても、それも良いと思ってほしいです。弟は弟なりにこれからも死ぬまで楽しくすごしてほしいです。

最優秀賞

t v k かながわM—I—R—A—賞

素直な心にふれて

聖セシリ亞小学校

六年 松井彩来

私は幼稚園の頃に知的障害者のための発達プログラムに参加していたことがありました。きっかけは母がその活動に参加していたからです。小さかった私は何も分からずに知的障害を持つ方達の中に交ざり、一緒に遊んだことを覚えています。初めて会った時もみんなが優しく声をかけてくださったおかげで、すぐに仲良しになりました。プログラムではリズム感を鍛えるために行進をしたり、その他にも发声プログラムやストレッチなどを行いました。時には自ら先頭に立ち私がお手本となつて行動していました。知的障害者の人達と関わってみて、だれとでも垣根がなく仲良く話してくれる姿から、とても素直な心を持つていて、小さい私の手をひいてくれたりと、とても気にかけてくれるそんな優しい一面も

持っていました。その中でも一番よく遊んだ方が数年前に亡くなつたと聞きました。ご家族もとても辛い様子でした。私は今でも明るく大きな声で話しかけてくれた彼の事を忘れることはできません。思い出の中では、彼のお弁当の中身が大好きなものでうめつくされていた事です。からあげ、お豆、ポテトフライといつも中身を私に教えてくれました。きっとお母さんが愛情をこめて作られたのでしょう。今でも思い出すと胸が熱くなります。障害者の中には短命の方もいらっしゃいます。彼も二十代という短い命でした。だからこそ価値のある充実した日々を過ごしてほしい、そのためのお手伝いを少しでもしていきたいです。周りの理解と支えがあれば、障害者と一緒により良く暮らす、そんな思いやりのある社会が生まれるはずです。そして純粹な心を持つ、そんな障害者の方にふれ合つてほしい。そうしてみて、初めて気がつくことがあると思います。そんな優しさであふれる社会になることを願つています。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

気付くこと、寄り添うこと

横浜市立飯島小学校

六年 橘 新太

福祉について考えようと思った時、ぼくは五月に祖母が入院した時の家族の出来事を思い出した。

いつも元気で活動的な祖母が大動脈解離という病気になり手術をし一ヶ月半入院した。突然大きな病気になり、病気になつた祖母が一番大変で辛いのだとぼくは思つていた。

ぼくは週末しかお見舞に行けなかつたけど母は仕事があつても毎日病院に行き、家のこともやつて、ぼくの習い事の送り迎えもしてとても忙しそうにしていた。

ある夜、父と話している母が大きな声で泣き出してしまつた。母が泣いてしまつた理由は、沢山のことを母一人が背負つてしまつていてる状態で苦しくなつてしまつたということ。母が

泣いてしまってまで父もぼくも母の大変さを感じてはいたけれど、「大丈夫だよ」という母を見ているだけだった。そこから父とぼくは自分で出来ることは積極的にやるようにして、母は祖母の退院まで仕事を休んだ。

病気をすると、病気になつた本人はもちろん、周りの家族の生活も一変してしまう。病気の人を支える人が辛くなつてしまわないように小さなことでも何かに気付き一緒に寄り添うことの大切なんだと、ぼくは身をもつて知つた。

無事退院した祖母は今リハビリを頑張つていて、母はいつもの騒がしい母に戻つた。

ぼくの考える福祉は、社会全体で考えるとともに小さなことかもしれない。でも身近な人の変化に気付き寄り添うことが一人でも多く出来るようになれば、また他の誰かに手を差し伸べることが出来るのではないかと思う。

自分らしさを失わないように、困った顔や泣き顔がまた一つ笑顔に戻れたなら、それを繋げることでより優しい社会になつてほしいとぼくは願う。

最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

ぼくのお兄ちゃん

小田原市立山王小学校

五年 我妻 遼哉

お兄ちゃんとは、自分よりもできることが多く、しっかりしている人と思つていました。だけど、ぼくのお兄ちゃんは想像していた姿と少し違っています。なぜなら、ぼくやぼくの弟が話しかけても返事をしないでビデオをずっと観ています。ひとりごとも多いです。またゲームをする時間の約束が守れなくて母にいつも注意をされています。ぼくも約束を守れなくて叱られることがあります。次からは気をつけようとしたり紙に守ることを書いたりしています。しかしほくのお兄ちゃんは同じことをくり返し言われていることが多いです。また、ぼくのお兄ちゃんはわからないことをぼくによく聞いてきます。お兄ちゃんなのに弟のぼくに聞くのはおかしいと思うこともあります。こんなぼくのお兄ちゃんは、自

閉症スペクトラムという障害があると母が教えてくれました。

ぼくは、障害とは何かよくわからないので、障害についての絵本を読みました。障害とは、生まれつき脳の働きに違う所があつてみんなとは違う指令がでることがある、と書いてありました。周りの人よりも成長がゆっくりということや困ったことも多いということを知りました。

ぼくは、この本を読む前は障害のある人はみんなと違う所やできない事も多くかわいそうという気持ちがありました。しかしその考えは違いました。障害をもつている人も自分が大好きで色々なことをがんばつているとわかりました。だからこれから障害のある人と出会つた時はできないことをおしつけないでやさしくがんばれと言つてあげたいです。ぼくもお兄ちゃんと一緒にいるときんかばかりでいやだと思うことも多いですが大切な家族です。家族が困つている時は助けたり力になつてあげたいです。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

『ありがとう』

川崎市立宮前小学校

六年 高月健多

福祉という言葉を聞いて、ぼくにはあまりピンとこないので国語辞典で調べてみた。すると「人々が安心して暮らせる環境」とあった。

ぼくの家庭の中でどう福祉が関わっているのかを考えてみた。

ぼくには、はなれて暮らしている祖母がいる。四年前に脳こうそくという病気になり右半身が不自由になってしまった。そのため、ほうちようをにぎれなくなつた祖母のために母が、のみこみやすい食事を作つてとどけるようになった。昨年には、とつ然病気で祖父が亡くなつた。だから日用品の買い物や郵便物や書類の代筆、ゴミの処理、入浴の見守りなど母がやつていてる手伝いの量が増えた。それから荷物が多い母のために父と姉が交代で運転し協力し

ている。

仕事や学校に通つて いる家族だけで祖母の手伝いをすべてする事は難しい。でも、祖母を助けてくれる人は、たくさんいる。ケアマネージャーさんは、定期的に祖母と連絡をとり家族にも必要な情報を伝えてくれる。訪問リハビリの人達は、週二回祖母の体をケアしてくれる。その他、異変に気づいた事があれば家族に連絡してくれる近所の人もいる。家族が訪問できない時も、多くの人達の見守りがあり祖母だけではなく、ぼく達家族も安心して暮らしていく事ができている。

最近の祖母の口ぐせは、「ありがとう。」だ。訪問してくる人達みんなに言つているように見える。ぼくが荷物を持つ手伝いをしただけでも言つてくれる。ただ不思議なことにそのひと言がとてもうれしく感じる。だからぼくも支えてくれている人達に「ありがとう」と伝えたい。そして祖母には、これからも元気で笑顔でいてもらいたい。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

前とちがうくらし

厚木市立北小学校

五年 小泉結愛

おじいちゃんが去年の一月に突然倒れ、脳梗塞と言われた。救急車で病院に行つたのがすごく悲しくて、パニックになつたのをすごく覚えている。

毎日会つていたおじいちゃんが、入院をして会えない日が続いた。

リハビリの病院に行き、リハビリをがんばつていたおじいちゃん。それからリモートで面会をした時、久しぶりに顔を見て少し安心した。あまり笑顔はみられなかつたけど、心が笑顔になつた。

その年の六月、おじいちゃんが退院した。元気だつた時より年老いていたけれど、笑顔はかわりなかつた。きんちょうしたけどれしかつた。おじいちゃんも家に帰つてきてうれし

かつたのか、笑顔が見えた。

いつもおばあちゃんが、「起こすのが大変。」と言っている。私はその言葉を聞いて助けるようになつた。

ある日私がるす番をしていたら、ドンッとげんかんから音がした。私が見に行つたらおじいちゃんがしりもちをついて転んでいた。おばあちゃんと一緒に持ちあげた。その時胸がドキドキした。おばあちゃんに「ありがとう」と言われ、力になれた事がうれしかつた。

私の父は介護福祉士の資格をもつていて。たくさん勉強をして社会福祉士の資格も取つた。今この会社につとめて二十五年、介護の仕事をしているのはすごいなと思う。

おじいちゃんに何かあつた時、パニックにならずにしんけんな顔をして助けている。私はそんな父をそんけいしている。だれかを助けている人はキラキラして見える。

私もそんな人になりたい。

これからもおじいちゃんを笑顔にして助けてあげたい。
長生きしてほしいからだ。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

私のリズムで進む

横浜市立篠原中学校

三年 矢部 宮瑚

私は障害者ダンサーだ。私には生まれつきデュアン症候群という目の障害がある。デュアン症候群とは目を上手く動かせなかつたり、物が二重に見える目の障害だ。

私はそんな障害を持つていて幼少期から病院に通い、沢山検査を受けてきた。しかしどんなに検査を受けても自分の納得のいく結果が返つてこず悩んでいた。また障害のせいで小学生の頃から嫌な思いを沢山してきた。小学生の頃までは自分の目が動かせない見た目で嫌がらせを受けて悩んでいたが、中学生になるとまた大きな悩みが増えたのだつた。それは「踊りにくさ」だ。4年前、私はダンスに出会つた。中学生になつてから本格的にジャズ

ダンスを中心に様々なジャンルのダンスに挑戦した。ダンスでは何も気にすることなく自由になれる、そう思っていた。しかし2年前、障害のせいでうまく踊れないということに気付いた。見た目だけではない悩みも増えたせいで、当時は本当に辛かつた。その後も大好きなダンスに全力で打ち込むことができず、しばらく辛い日々が続いた。

そんな中私は偶然東京パラリンピックの閉会式で年齢や性別、様々な障害を超えて踊るダンサーたちを見た。そのステージでは様々な要素をもつたダンサーたちひとり一人が主人公のようにキラキラ輝いていた。私はそれを見て「障害はその人の可能性を否定しない」のだと感じた。また障害があるということは不便だけれど不幸ではないということにも気付いた。そして私は2年前、初めて自分の障害と共にダンスコンテストに挑戦することにした。はじめは障害のせいで自分の踊りたいように踊れないことが多く悩んでいた。踊りながら目がうまく動かせない。という自分の目の障害とどう向き合つていけば良いかを考えた結果、私は移動で他のダンサーとぶつかる恐れがないよう、コンテストにはソロで挑戦した。次に目が動かしやすい向きで、障害に気を使わずに自由に踊れるような振り付け、曲選びを自分で行つた。そして沢山の人の助けを受けて、初のソロコンテストで全国大会にまで上り詰めた。ソロコンテストで自信がついた私は3ヶ月後に友人と新たなダンスの作品を作つた。その作品でも私たちは全国大会で準優勝を取ることができた。今までのダンスでは大人数で踊るものが多く、周りに合わせてばかりな自分がいた。しかし大人数ではなく個人でのダンスで勝負をすることで、新たにあることに気付いた。それは「みんなと同じに正解を求めずに私にしかな

い正解を求めていく」ということの大切さだ。

障害を持つても持つていなくても人にはそれぞれ捉え方、ペース、特徴などの違いがある。その違いをみんなに合わせる必要はない。きっとその違いを自分にしかない強さに変えられるからだ。またそう思うのと同時に、私は障害を持っている人も輝ける、生きやすい世界になつてほしいと強く思う。自分の障害を受け入れて生きていくということは本当に大変なことだ。だからこそ世界で障害、違いを持つている人を理解し認め合う心を持つてほしい。そうすれば多くの人が心地よく過ごせる世界となるだろう。

私の将来の夢はダンサーだ。「自分にしかない正解」を伝え、多くの人に勇気を与えるようなダンサーになること、それが私の夢だ。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

兄が見せてくれた、幸せの形

伊勢原市立山王中学校

三年 小島杏奈

私の兄は知的障がいを持つています。「障がい者」と聞くと、多くの人は日常生活で常に介助が必要で、友達と遊んだり社会で活躍するのは難しいと想像するかもしれません。「かわいそう」「不幸」と感じる人もいるでしょう。私も幼いころ、兄の障がいを説明すると相手の表情が曇るのを何度も見ました。それだけ「障がい者＝不幸」という固定観念は根強いものだと思います。

けれど、兄はそのようなイメージとはまったく違う日々を送っています。陽気で優しく、冗談が好きで、人と話すのも大好きです。ごみ捨てに行く途中の道でも「おはよう！」

と笑顔で兄から声をかけ、返してくれる人がたくさんいます。職場に友達も多く、休日はいつもしょに食事や趣味の話で楽しい時間を過ごすこともあります。

兄は家を出て、グループホームで生活しています。グループホームとは、同じように障がいを持つ人たちが支援員の助けを受けながら共同生活をする場所です。そこでは朝起きて出勤し、兄は持ち前の明るさを活かし上手く会話をして働きます。昼休みは同僚と弁当を食べ、趣味の話で盛り上がります。休日に実家へ帰ると、家族と食事をしながら近況を楽しそうに話してくれます。

こうして書くと、ごく普通の日常のようですが、この「普通」を兄が手にしていることこそ大切だと私は感じます。障がいがあつても暗く孤独な人生とは限りません。兄は自分なりに人間関係を築き、社会の一員として生きてています。

ここに至るまでには、多くの人の努力と見守りがありました。学生時代は勉強や運動で苦労し、落ち込む日もありましたが、家族や友人、先生が兄の得意や好きなことを見つけ、伸ばす手助けをしてくれました。できることや楽しめることが増えると、それが自信となり、表情や行動にも前向きさがあふれるようになりました。

これまでのことから、人は得意や好きなことを活かせると私は学びました。障がいのある人には特に重要で、周囲が力を信じ、環境を整えるかどうかで人生の質は大きく変わります。安心して挑戦できる環境は、その人の未来を大きく変える力があります。兄の場合は、家族や地域、学校、職場が協力し、挑戦できる場をつくってくれました。そ

れらの見守りがあつたからこそ努力を続けられたのです。もし、最初から「できない」と決めつけられていたら、今のような生活はなかつたかもしません。

今の日本には、障がいのある人がその人らしく力を発揮できる「輝ける場所」をもつと増やす必要があります。特別な施設や立派な舞台よりも、安心して参加でき、受け入れられる場所なら、それは立派な輝ける場所です。

兄の姿は、環境が人を変える力を持つていていることを教えてくれました。障がいがあつても不幸とは限りません。

どんな人でも自分らしく輝ける場所があることが大切だと考えます。障がいの有無や得意、不得意にかかわらず、その力や魅力を発揮できる場があれば、自信を持つて生きていけます。周囲の理解や支えがあれば、誰もが社会でかけがえない存在として輝けるのです。

兄のような知的障がいに限らず、発達障がいや精神障がいなど、見た目では分かりにくい障がいを抱えていて生きにくさを感じている人たちがいます。そうした人たちが、安心して自分らしく力を発揮できる「輝ける場所」が、もつと増えてほしいと願います。誰もが自分らしく生きられる社会こそ、本当の意味で豊かな社会だと思います。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

姉から学んだこと

川崎市立塚越中学校

三年 前田結莉

私は五歳年上の姉がいます。姉は、視覚障害と発達の遅れの二つの障害を抱えながら生活しています。そんな姉が前向きに過ごしていけるのは、姉自身の努力はもちろん、多くの人からの支えもあつたからこそだと日々私は感じています。

姉が抱えている障害は、視力が不安定で眩しさに弱く、距離感や物の形が分かりづらいことがあります。また、発達の遅れの特性として、会話のニュアンスを読み取ることが難しがつたり、急な予定変更に強い不安を感じたりすることもあります。そんな姉と日々を共にする中で、私は、障害を持つ人が安心して生きていくために必要なのは、「制度や支援」だけではなく、「社会の理解と多くの人の支え」だと強く実感するようになりました。

姉は幼い頃に右目の手術をし、右目は光だけが見えている状態で、左目は生まれつき視力が〇・一以下しかなく、眼鏡をかけてもほぼ変わらなかつたため、常に誰かが付き添い、サポートをしなければいけません。

姉は外出をするときに、白杖を持つと「歩きにくい」と言つて白杖を持たず、眼鏡もかけないため、本当は目が見えているのではないかと周りから時々疑われることがあります。視覚障害は「全く見えない」というわけではなく、「一部が見えにくい」「暗さに弱い」「眩しさで物が見えにくくなる」など、人によつて状態が異なります。しかし、そのような現状はあまり知られていません。同様に、発達の遅れのことについても、姉が話の流れについていけなかつたり、言葉の意味をそのまま受け取つてしまつたりすると、「変な子だね」「空気が読めないんだね」といった言葉をかけられことがあります。障害があつても、そう見えないことが多いため、誤解や偏見を持たれることも少なくありません。けれど、そんな中でも姉は、自分なりに工夫をしながら日々を頑張つて生きています。そして、その背景には、多くの人の支えや制度の力があります。姉は障害がある人の社会参加を支援するための活動をする障害福祉サービスの団体で、絵のアーティストとして活動をしています。この活動をする場所では、本人のペースを大切にしながらサポートをしてくれて、姉も安心して過ごすことが出来ています。また、スタッフの方々は姉の特性を理解し、「できないこと」ではなく「できること」に目を向けて接してくれています。しかし、障害がある人への理解は、まだ十分とは言えません。特に、目に見えにくく、誤解されやすい障害については、正しい知識が広

がつていないと感じます。だからこそ、私たち一人ひとりが障害がある人について知ろうとすること、理解しようとすることが大切なのだと思います。特別なことをする必要はありません。困っている人たちに「大丈夫ですか」と声をかける勇気を持つこと。人を見た目で判断しないこと。相手の立場を想像すること。そうした小さな行動が、障害のある人にとって大きな支えになるはずです。

姉の存在は、私にとって学びの連続です。障害があるからといって、不自由な生活を送るわけではなく、周囲からの理解や多くの人からの支援、本人の前向きな気持ちがあるからこそ、自分らしい生き方を見つけることが出来るのだと私は、姉を通して学びました。

私は、障害があるなしに問わらず、全ての人が個性の違いを尊重し合い、支え合いながら共に生きていく、自分らしく生きられる、そんな社会を創る一員になれたらと思っています。

最優秀賞

t v k かながわM—RA—賞

カラフル

川崎市立柿生中学校

一年 大久保 歩

あなたは「障がい」をもつていますか？あるいは、「障がい」をもつた人が周りにいますか？私は、私自身が「障がい」をもつています。他の人より少し聴力が弱く、補聴器を使用して日常生活を送っています。そんな私が障がい者として感じていることを伝えます。

まず、あなたは「障がい」と聞いてどんな事を思い浮かべるでしょうか。「障がい」と一括りにいっても様々な種類があります。これらを大きく分けると、「身体障がい」、「知的障がい」、「精神障がい」の三つになります。私の場合は聴力なので、一つ目の「身体障がい」に当てはまります。

この「障がい」をもつて生活するうえで、私が困ったり、悲しくなった出来事をいくつか

紹介します。

先に述べたとおり、私は補聴器をつけています。この補聴器は、よくイヤホンと間違えられてしまいます。小学一年生の子と接したときのことです。「歩ちゃん、イヤホンつけてる！ いけないんだ」と言われました。相手はまだ小さいので説明しても理解してもらうことができませんでした。誤解されたのが悲しかつたし、そのことを上手に伝えられなかつたことが悔しかつたです。他にも「それ、何？」と何度も聞いてきたり、補聴器をとろうとされたりと、対応に苦労することがありました。

また相手の話を聞きとれず、何度も聞き直すこともあります。それでも、結局何を言つているのか分からず、何度も聞くのが申し訳なくなつて、それ以上聞き直しませんでした。そのせいで話が噛み合わなくなつてしまい、きちんと聞きとれない自分に腹が立ちました。他にも同じような経験がたくさんあります。

このような事を知ると「障がい」があると嫌なことだらけだと思うのではないでしようか。しかし、実はいいこともあります。

あなたは骨伝導や、あえて雑音が流れている中で音を聴きとるなどの特別な聴力検査を受けたことがありますか？これを私は、小さい頃から続けています。つまり、みんながしていない経験をしているということです。私は、これをすごいことだと思います。それはみんなが知らない世界を知つているからです。

社会には「障がい」をもつ人に対して、距離をおく人がいます。それは、分からぬ、知

らないことに対するとまどいなんかもしません。

でも、私はこう考えています。「障がい」は「優劣」ではなく、単なる「違ひ」です。そしてこの「違ひ」は「個性」です。私の場合は、「聴力が弱いこと」です。一見マイナス思考に傾いてしまいますが、これは私にとつて宝物です。なぜなら、これのおかげでみんなが知らない世界を知ることができたからです。これがなかつたら今の私はなかつたと言い切れるほど大切です。あなたにも「個性」はあります。視力が弱い、人と話すのが苦手など。これらはすべて、欠点ではなく「個性」です。そのため、とまどつたとしても近づく努力をするべきだと思います。まずはよく見てください。そして、相手の立場になつて物事を考えてみてください。そうすれば相手の気持ちが分かるようになると思います。その上で行動してほしいです。

そして、このことは「障がい」の有無に閑らす誰に対しても同じです。最初はできなくても、相手を知ることで、自分の世界が広く豊かになり、それが人生をより鮮やかにしてくれるのではないかでしょうか。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

見守る心

秦野市立本町中学校

一年 諏訪 寛次

僕の家の先に一人暮らしのおばあさんが、住んでいます。
雨の日も、暑い日もシルバークーの座席にゴミ袋を置いてゴミの日に収集場所まで歩いて
出しに来ます。行きは、なだらかな坂になつてるので、おばあさんは少し進んでは、立ち
止まり休憩をして又、ゆっくり進み収集場所まで歩きます。

雨の朝、僕がゴミを出して帰ろうとしたらおばあさんが、シルバークーを押して歩いてくる
のが見えました。両手でカートを押しているので傘もさせず、濡れながら歩いていました。
すぐに、おばあさんに
「ゴミ持つていきます。」

と伝えると

「ゴミ出しは、私の運動だから。これぐらいは自分でやらないと、だから大丈夫だよ。」
と言わされました。

「ゴミ出しが運動」

その意味が最初は分からなかつたが、家に帰つて母に伝えたら、おばあさんは足腰が弱らない様に、朝夕と散歩に行き、リハビリのデイサービスに通つていつまでも自分の足で元気に暮らせるように過ごしていることを聞きました。

「大丈夫。」

と言われた時に、雨が降つていたから僕に遠慮したのだ。濡れながら歩くなら、頼めばいいのに。

と思つたが、良かれと思つて僕がやつてしまふと、その人の頑張つている事や、今できる事を取つてしまふのだと知りました。

「近所で見守ることが一番大事。」

と母は言いました。

母はおばあさんの家に回覧板を持つていく時は、顔を合わせて挨拶をして会話をし、家の前を通りときは、新聞が溜つてないか、何か変化がないか気にかけ見守つていると話していました。

「見守るつてなんだろ？」

言葉を調べたら

「危険がないように気を配る」とあつた。

僕が小学校の時は毎朝、おばあさんの家の前を通ると

「おはよう。いってらっしゃい。」

「雨だから車に気をつけてね。」

「最近、お兄ちゃんは見ないけど元気?」

と声をかけてくれました。ただの挨拶だと思つて言葉を交わしていたが、おばあさんに毎朝、見守つてもらつていたのだと気づきました。

今の僕ができる事は何だろう。

おばあさんは自分の足でゴミを出したい。僕が出来ることは、ゴミが多い時は、シルバー カーのバランスが崩れ転びそうなので一つゴミを持ってあげて、一緒に歩きたい。雨の時は傘を差してあげたい。ゴミの収集場所はカラス除けのネットが重いので、ネットを開けてゴミを捨てやすいように手伝いたい。歩行が大変そうなときは声をかけて手伝える事があるか会話をしたい。

これならおばあさんの運動を応援しながら僕ができる事かなと考えました。

そして、沢山のあいさつで今まで僕たち家族を、ずっと見守つて応援してくれたようにこれからは僕も、一人暮らしのおばあさんが困つていることはないか?何か変化はないか?と感じながら、おばあさんに会つたら見守る心をプラスして大きな声で、あいさつをしたい。

そしておばあさんを見守つていきたい。



最優秀賞

日揮社会福祉財団ふれあい賞

教科書じや学べなかつた福祉

大井町立湘光中学校

三年 藤澤 優 羽

今年の夏、父が働いている老人ホームに、ボランティアとして行くことになった。きっかけは、父から一度来てみないかと声をかけられたことだった。最初は少し戸惑った。父の職場に行くのは恥ずかしかったし、高齢者とどう接すればいいのか分からなかつた。けれど、少しでも人の役に立てるならと思い、思い切つて参加することにした。施設に入ると、冷房の効いたロビーに、どこか懐かしいような香りが漂つていた。スタッフの方に案内され、いくつかのグループに分かれて、お年寄りと過ごす時間が始まつた。私が担当することになつたのは、ほとんど言葉を話さないという、車いすの男性だつた。

「この方は耳が少し遠くて、最近は言葉も少なくなつていて。でも、手を握つてあげると落

ち着かれるんです」

スタッフの方がそう言つて微笑んだ。私は正直、戸惑つた。ただ手を握るだけでいいのだろうか。それで意味があるのだろうか。でも、目の前のその人にとって、それが必要な時間なのだと思い、そつと手を差し出した。彼の手は少し冷たく、細くて、でも少し力がこもっていた。ゆっくりと手を握り返してくれたとき、不思議と胸がじんとあたたかくなつた。何も言葉は交わしていないのに、ありがとうと言われたような気がした。そして私の中に、それまで感じたことのない感情が湧いてきた。誰かの存在をそばで支えるということは、特別な技術や言葉がなくてもできるんだ、と気づいた瞬間だつた。その後、何度か施設を訪れた。行くたびに、その男性は私の顔を見ると少しだけ笑つてくれるようになつた。話せないけれど、目や表情で気持ちが伝わるということを初めて実感した。ある日、施設に行くと、その男性の姿がなかつた。職員の方から

「先週、静かに旅立たれました」

と聞かされたとき、私は涙が出そうになつた。長い会話をしたわけでも、特別な思い出があるわけでもない。でも、心が通じたと感じたあの時間は、私にとってとても大切なものであり、彼にとつても、少しでも穏やかな時間になつていたと信じたい。この経験を通して、私は福祉の本当の意味を知つた気がする。福祉とは、特別な人がする特別なことではない。誰かの気持ちに寄り添い、その人の人生にそつと関わること。それは、私たち一人ひとりにできることだ。福祉とは人を助けることではなく、一緒に生きることなのだと思う。これか

らの社会は、どんどん高齢化が進んでいく。介護や医療、地域の支え合いがますます大切になる中で、福祉は誰にとつても無関係なものではない。私自身も将来、誰かに支えられ、また誰かを支える立場になるかもしれない。だから私は思う。人と人が向き合い、心を通わせること。それが福祉の原点なのではないか。たとえ言葉がなくとも、ただそばにいること、手を握ること、目を見て微笑むこと。その一つ一つが、誰かの心を支える福祉なのだと、私は信じている。



最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

支援をする人のために

座間市立東中学校

二年 鶴見柚月

いきなりですが、みなさんは六十年後支援を必要とするような暮らしをしている自分の姿を想像できますか？また、福祉と聞いて何を思い浮かべますか？

私は去年福祉学習で、高齢者福祉について学習しました。どの場所に体験に行つても、「高齢者の方は大変だから支援しないとな。」と強く思いました。

私は近くに住む祖父母がいます。二人とも明るくて優しくて、私は二人が大好きです。ですが、祖父はあまり体が思う通りに動きません。また、去年がんにかかりました。今は回復していますが、このようなことがあり、私は身近な人の福祉について考える機会が去年は多くありました。

ここからは福祉学習で学んだこと、祖父母と接していて思うこと、について分けていこうと思います。

まず、私達の学年は総合の学習として福祉について学習しました。私は高齢者福祉を行っていたので高齢者介護施設で働いている方の話を聞くことができました。その体験を通して、高齢者の方は大変な暮らしをしていて、そんな人々を支えてくれる施設だと知りました。また、私達はフィールドワークで現地の人の話を聞いたり、工夫されている点、改善点を探したりしました。そこでは改善点が見つからないくらい工夫がされていて、高齢者の方を考えて工夫してくださいとする施設の方は本当にすごいなと思いました。

ここまで長くなってしまったが、私は福祉体験を通して「高齢者の方は大変だな。」よりも「支援する人ってすごいな。」という思いが強かつたです。

次に、先ほど言つた通り私の祖父はあまり体が自由に動きません。でも私達の好きな料理を作つてくれます。そんな祖父を見ていて、祖父は元氣でいるものだと勝手に思つていました。だからこそ、祖父ががんになつてしまつた時はとてもショックでした。その時、私は初めて身近な人を支える立場になつたのだと実感しました。その時、同じ支える立場として祖母のことにも目を向けられるようになりました。祖母は誰よりも不安で悲しいはずなのに、そんなことを感じさせないほど懸命に祖父を支えていました。でも祖母だって高齢者です。祖母は元氣ですが、よく病院に通っています。そんな祖母が、安心できず、大変な思いをしている環境でいいのかと思いました。

私が福祉について思うことは、支援を必要とする人ももちろん大変な思いをしていますが、その支援をする人も色々な思いを抱いて、大変な思いをしているということを多くの人に知つてほしいのです。

そして、冒頭の問いでですが、福祉と聞いてきっと皆さんは支援を必要とする人を思い浮かべたのではないですか？私も実際、福祉と聞いて支援を必要とする人を思い浮かべていました。私達は福祉学習で「支援を必要とする人が安心して暮らせるために」を考えきました。でも、私はこれから福祉の形として「支援をする人が安心して支援ができる環境」をつくることが大切だと思います。これは、私がファイールドワークや身近で、支援をする人を見ていて一番これから実現してほしいと思ったことです。実際もちろん福祉とは「誰もが幸せになるために支援すること」だと思います。でも、私は福祉と聞いた時に、支援をする人を見て人だけでなく、支援をする人も思い浮かぶようになつてほしいです。

私はただの中学生なので、そのための社会を作ることはできません。でも、この考え方が少しでも広がつて、「支援をする人が安心して支援できる環境」に少しづつなつていったらいなと思います。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

知つてみなきやわからない

厚木市立林中学校

三年 後藤杏香

私の弟は特別支援学級に通っています。小学校と中学校にも特別支援学級はあり、通っている友人、クラスメイトもいて、そのクラスの掃除当番にもなったことがあるので支援級と無縁ではありませんでした。そこには脳に障がいがある子や、手足が不自由な子、どうして通っているのかなと感じる子。いろんな子がいました。不思議な子も多いけれど、みんないいんです。私もその子達と話すことが大好きでした。ですが、

「障がいがあつて通常学級に入れない子達が通っているクラス。」

「特別教室にトランポリンがあつた。私達は勉強しているのに。」
と、そのクラスに通っている子達を下に見たり、妬む気持ちも心のどこかにありました。

そして弟がそこに通うことになったと母親から聞いたとき、弟を羨ましく思いました。弟のことが少し嫌いになりました。

ある日の放課後、弟がリビングにプリントを持って走ってきました。

「なにそれ。」

と聞くと、

「しゅくだいやらなきや。」

と返ってきました。支援級の生徒も宿題が出されるんだと思いました。その時気づきました。私は支援級のことを何も知らないなど。支援級がどんなことを授業中に行っているのか、どんな場所なのかも少ししか知らず、支援級と支援級に通っている子に悪い印象を持っている事に気づいたのです。悩みながら一生懸命プリントに鉛筆を走らせる弟を見ていると、自分がとても恥ずかしくなりました。

それから、母親に頼み支援級について教えてもらうことにしました。見せてもらつた弟の時間割には「自立活動」という授業がありました。自立活動では児童の自立に向けて生活習慣や社会スキルを身につける授業で、運動や校外学習など様々な活動を行っています。例えば自分の気持ちを言葉に出して伝える練習や、校外学習では公共のルールやマナーを学んでいます。私が遊んでいたことは自立活動の一つであつたと気づきました。それから、弟の時間割には通常級の音楽と支援級での音楽がありました。これは通常級での音楽は私達と同じように曲の鑑賞や楽器の練習などをを行い、支援級での音楽は音を通して協調性

や周りの状況を理解する力を少人数で育むことを目的としている、などの違いがあります。支援級では少人数で苦手なことを重点的に行ったり、その生徒の良さを認め、伸ばし、活かす活動を行っていることがわかりました。

また、母親は支援級に通う子を持つ親の気持ちも教えてくれました。母親は友人や近所の人などの目が気になつたと言つていました。特に、知り合いから支援級のことを「そんなところ」という言い方をされて傷ついたそうです。私も弟の癪癩や泣き声に苛ついて怒鳴つてしまつたことがあります。子供の支援だけでなく、親やきょうだいに對しての支援も大切なことだとその時初めて気づきました。

私のように、支援級がどんな場所なのか、どんな活動をしているのかを知らずに支援級の生徒を下に見たり、怠けているなどと考える人もいます。そしてその気持ちは本人だけでなく、親やきょうだいの心も傷つけることがあります。私は今でも弟を羨ましいと思う気持ちはあります。が、支援級で自分の得意なところを伸ばし、頑張っているんだと思うと自分も頑張ろうという気持ちにさせてくれます。私は支援級に通う本人や関わっている人以外の通常級の生徒や先生などにも支援級について、障がいについて知つてもらうことで私のように勘違いしている人たちが減り、支援級の生徒や家族の人たちが生きやすい世界になればいいと考えています。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

たすけあい	横浜市立港北小学校	一年
子どもホスピスおうえんだん	川崎市立菅小学校	二年
マーケにかくれたやさしさ	伊勢原市立高部屋小学校	二年
私のかわいい弟	横浜市立大曾根小学校	二年
「お兄ちゃんとともに みんなとともに」	南足柄市立南足柄小学校	二年
スロープのむこうに広がる世界	松田町立寄小学校	二年
誰かが誰かのために	横浜市立飯島小学校	二年
手術の経験を活かして	座間市立東原小学校	二年
引き継いでいくバスの旅	座間市立立野台小学校	二年
シッティングバレーから学んだこと	開成町立開成小学校	二年

六年 六年 六年 六年 六年 六年 五年 五年 四年 五年 二年 二年 一年

中 鈴 築 西 星 相 高 和 福 越 前 谷 間
山 木 輪 村 野 馬 林 泉 心 み
希 歩 李 勇 芽 藤 紗 玲 心 み
咲 花 愛 翔 依 乃 那 花 護 さ

準優秀賞

なつやすみのおひろめかい
思いやりのあふれる世界に
みんなにやさしい小田急線
いつまでもおじいちゃんと
手伝うつてどういうこと?
私の友達

ルピナス

みんなでつくり上げる福祉

小さなやさしさから生まれる福祉

ぼくがおばあちゃんにできること

横浜市立馬場小学校

川崎市立南百合丘小学校

伊勢原市立竹園小学校

海老名市立中新田小学校

大井町立相和小学校

相模原市立鳥屋学園

愛川町立中津小学校

三浦市立上宮田小学校

寒川町立南小学校

開成町立開成小学校

六年 六年 五年 五年 五年 四年 四年 四年 一年

小見山 前田 神保 藤原 木川 長谷川 西木 鈴木 本花外
稀莉 千大 わ陽 知丈 杏祢
一玖 実雅 こ向 花智 奈音

中学生の部

優秀賞

みんなが笑顔になれる街に
歩み寄り
曾祖母が残してくれたもの
支えられて、気づいたやさしさ
みんなとの関わり
優しさが乗るバスに私も乗りたい
「自分にできることから始める」
本当のバリアフリー化
家族の吃音症から学んだこと
場面緘黙症の弟と私

相模原市立藤野中学校
鎌倉市立深沢中学校
秦野市立北中学校
伊勢原市立成瀬中学校
相模原市立串川中学校
平塚市立春日野中学校
厚木市立荻野中学校
伊勢原市立成瀬中学校
寒川町立旭が丘中学校
松田町立松田中学校

三年 三年 三年 二年 二年 二年 一年 一年 一年

加橋 力 篠 森 春 吉 神 渡 小
藤 本 久 崎 田 田 戸 辺 嶋
志 蓮 あ 光 愛 桃 海 彩 葉
乃 央 い 希 美 梨 花 凜 奏 映 央

準優秀賞

点字ブロックの大切さ
誰もがすこしやすい社会へ
見えない障害
あの手のぬくもり
心が通じ合ったとき
おじいちゃんが教えてくれたこと
言葉より大切なもの
耳ではなく、心で聴く
今のわたしが想うこと
晴れ着にこめた思い

鎌倉市立深沢中学校
葉山町立南郷中学校
大井町立湘光中学校
伊勢原市立伊勢原中学校
川崎市立塙越中学校
大和市立引地台中学校
寒川町立旭が丘中学校
寒川町立旭が丘中学校
開成町立文命中学校
開成町立文命中学校

三年 三年 三年 三年 三年 二年 一年 一年

瀬戸大木 齋藤 神谷 麻生 齐宮 古谷 郡子 琳奈 梨美 凌久
結心 うらら

第48回 神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 令和7年度

令和7年12月発行

発行者 社会福祉法人 神奈川県共同募金会
〒221-0825 横浜市神奈川区反町3-17-2
電話 045(312)6339

社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
電話 045(312)4813

印 刷 神奈川新聞社

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会